２０２４年２月の総評：木下龍也

実はもう忘れてしまっている鳥を
もとのかたちにもどしてあげる／まちりこ

人間から見れば、車に轢かれてぐちゃぐちゃに死んでしまった「鳥」を生き返らせているように見えるかもしれないですが、「実は」そうじゃなくて、ただ「もとのかたちにもどしてあげる」だけなんですよ。ちょっとした怪我とかなら、自力で「もとのかたち」に「もど」れたりするんですけどね、こうなってしまうと「もう忘れてしまっている」から、私の手が必要なんですよね。と言いながら「鳥」を復活させている主体が見えてくる。生も死も人間が決めたことで、神から見ればそうなのかもしれない。

さわがしい友達だけど
みずうみに
沈めたままの浴槽がある／穴棍蛇にひき

明るく振る舞っているけれど暗い過去がある、というのは映画や小説などで使われる設定だが、短歌のサイズに圧縮されたそれとして、読者はふたつのシーンを見せられる。ひとつは「さわがしい友達」、もうひとつは「みずうみに沈めたままの浴槽」。暗い過去を担うのが後者で、この担わせ方が巧い。ありえなくもなく、しかし平凡ではない。けれど、両者の間に対極と言えるほどの距離を生み出す。沈んだ、ではなく「沈めた」とあるから、能動的な行為だとわかるが、ではなぜ、というふうに距離を埋めようとすると詩情に目を塞がれてしまう。そんな一首だった。

悲しみが染み付いている家にある
ペットボトルのボウリング場／小宮颯人

ピンに見立てた「ペットボトル」１０本を逆三角形に並べておくだけで、その周辺（直線上？）だけは「ボウリング場」となる。球を転がせば楽しいし、転がさなくても自分には遊ぶ気力がまだあるんだ、というふうに思える。やばい状況なのに自分のユーモアに気持ちがちょっと楽になる、みたいなことかもしれない。「ペットボトルのボウリング場」は「悲しみが染み付いている家」のなかにつくられた結

界のようなものなのだろう。事故物件なのか、現在の住人の「悲しみ」が「染み付いている」のかは不明だが、それがあるうちはまだなんとかなりそうだ。

音の無いトムとジェリーが
繰り返し流れる待合室で眠った／狛犬吠

小学生の頃、スイミングスクールに通っていた。水着に着替え、開始時間になるまで待機スペースで眺めていたのが「音の無いトムとジェリー」だった。ブーメランパンツの水着が恥ずかしかったことや練習後の肉まんが美味しかったことはよく覚えているが、ただの繋ぎとしてあった「音の無いトムとジェリー」は記憶からすっぽり抜け落ちていた。この短歌を読んだとき、それが一気に蘇った。多分もう忘れないだろう。どうしても必要で探していたピースではないけれど、なんでもないことを永遠にしてくれた。僕にとってはありがたい一首だった。

膝を眼窩に嵌め込んで
化け物みたいに時空へ逃げた／五月閉じ花

体育座りの状態であれば「膝を眼窩に嵌め込んで」に似たようなことができる。実際に「嵌め込」むのは無理だが、押し当てることはできる。それはおそらく両手で目を塞ぐよりも数段上の逃避のポーズだ。「時空へ逃げた」とあるが、身体はそこにあるままだ。心だけはここではないどこかへ飛ばした、という感じだろうか。「膝を眼窩に嵌め込んで」と書いてみると確かに「眼窩」から膝下が生えている「化け物」を想像できるかもしれない。そんなふうに自身を俯瞰できるのも、渦中から抜け出せたからだろう。短歌かと思ったが、三句がなかった。

光には光の言葉
木洩れ日が聞きとれなくて
人は幸せ／ひろみ

例えば僕が「木洩れ日」にアテレコしてみても、それは僕が目や肌で感じた印象を「人」の言葉で発しているに過ぎない。「木洩れ日」が何と言っているかはわからないから、美しさやあたたかさのイメージに引っ張られながら喋るだろう。けれどもしかしたら、燃え尽きろ、と言っているかもしれない。たまたま人間にとってちょうどいい距離に太陽があるからそうなってはいないが、その可能性はある。だ

としたら「聞きとれなくて人は幸せ」だ。そういえば、植物はストレスを感じると人間には聞こえない悲鳴を上げるらしい。「聞きとれなくて」よかった。

天国に命を返すみたいだね
君の綺麗なフリースローは／中原紘

「天国に命を返す」には、だれもが思い浮かべられる映像がない。だから比喩として成立させるのは相当困難なはずなのに、成功しているように思う。成功の理由は「天国に命を返す」に、だれもが思い浮かべられる映像がないからだ。声援が消え、しなやかな跳躍とともに手を離れたボールが放物線を描きながら、ゴールに吸い込まれていく。そんなだれもが一度は見たことのある「フリースロー」の明確な神聖さと「天国に命を返す」というぼんやりとした神聖さを結ばれてしまうと、もうそのつながりを解けなくなるというか、「天国に命を返す」に「君の綺麗なフリースロー」がぴったり貼り付いて剥がれなくなる。お見事。

ルンバどこいくのそっちは冬の海／斎藤よひら

オチまでの持っていき方にやられた。「ルンバ」は家庭用ロボット掃除機だから、場面としてはリビングやキッチンなどの部屋を想像してしまう。賢いけれど、持ち主の意図しない方向に進んだりもするから「どこいくのそっちは」という状況も多々ある。ここまでは日常の範囲内だ。けれど「冬の海」と置かれると、想像していた場面が裏切られる。ここは砂浜や崖だったのだ。主体が突然こわくなる。映像化してしまったらこの仕掛けは台無しだろう。最初から砂浜や崖を映してしまうからだ。テキストだからこそできるどんでん返しである。

春色に殴られながら会社員／檜野美果子

やわらかい日差し、桜や桃などの植物、春物の衣服、新入生や新入社員、旅行やお花見に出かける人々。穏やかで、新しくて、楽しそう。そんな「春色」たちを目に映しつつ、「会社員」をしている。パステルカラーの世界に落とされた一点の黒色のように居心地が悪い。自分だけが世界から浮き彫りになっているようで、ヒリヒリする。むこうに攻撃するつもりはなくて、こちらが勝手に拳に当たりに行っているだけなんだけど、やっぱり痛い。無職でも似たように感じそうだけれど、自由が少ないという点で「会社員」の方が「殴られ」ている感覚が強いのかもしれない。

ゆきどけ　は
いつも
いのちのところから／かわなご　まい

　あたたかい、とは書かれていないのに「いのち」のあたたさを感じさせる。「いのち」「から」ではなく、「いのちのところから」というやわらかい把握の仕方が無理なく事実を捉えていると思う。それは植物や土の周辺だけに限らず、だれかが住んでいたり、歩いていたりする、人間の営みのようなものも含むのだろう。はっとさせられる鋭い視点だけれども、その鋭さをそのまま出すのではなく、やさしく包んで読ませる。胸を刺されるのではなく、肩を撫でてくれるような作品で、自分も歌人としてはこうありたいと思った。

以上です。
みなさまには申し訳ありませんが、自己都合により、今回で選者を退任させていただくことになりました。これまでたくさんのご投稿をありがとうございました。
引き続き、口語詩句投稿サイト72hをよろしくお願いいたします。

木下龍也